

第2回リビングラボシンポジウムメモ

令和5年度「浜通り復興リビングラボ」実証事業の講評

<オリエンタルコンサルタンツ、NTT-ME、NTT インフラネット×富岡町、浪江町>

近藤先生) この数カ月でここまで進めることができたのは、実績ある民間企業だからこそ。データ活用基盤は整ったと思う。国交省のプラトーと同様に3D 都市モデルは複雑な権利関係等がある大都市圏で主に使われると思う。(浜通り地域は) 大都市圏と異なる条件であり、ニーズが違うと思われるが、そのあたりをどう考えているか、自治体の方に伺いたい。

浪江町) エフレイが駅の西側にできることで、まちなみが変わるが、なかなかイメージが付きにくい。どう変わるのか、可視化してイメージをふくらませてまちづくりに生かしたいと考えた。

富岡町) 夜の森では建物が解体され更地化されているところがあり、今後その夜の森の活性化を進めるにあたってどのようにすればよいか、連携しながら議論していればよいと考えた。

近藤先生) 私の専門は、都市計画の地域社会システムで、ざっくり言うとまちづくりになるが、大都市圏と違うモデルを活用していくというところで、ヒューマンスケールが大事だと思う。ヒューマンスケールでまちを見ていく中で、住まう人の思いや考えをナラティブに拾って物語るデータを付け加えると、その先にある皆さんが考える未来のまちづくりができるツールになると思う。ナラティブなツールになるために市民の感覚が必要だが、どのように巻き込むかを伺いたい。

オリコン) 昨晚浪江町で開催された参加企業の交流会の場で、復興地域として、浪江町、富岡町で特有の3Dモデルの活用があるという話になった。モニターを募って住民を巻き込んだ格好でツールの活かし方をバージョンアップできるのではないかと議論をしたところであり、行政と企業だけのツールにとどめてしまうと持続しないのではという危機感を持った。住民を巻き込んだまちづくりをこれから準備していく。

<UR システムズ×南相馬市>

近藤先生) 行政サービス向上を目的として、移住したい人や空き家を活用したい人にとっていかに効率的に情報提供してもらえるかを代替する事業と理解した。空き家情報を吸い上げるのに現在は自治体職員が現場に足を運んで集めていると思うが、それが大変だと推察する。その部分を効率化する予定や計画はあるか。

URS) 我々も当初その点について懸念したが、南相馬市は既に空き地空き家データを多く保有しているとのことで、ご一緒させていただくこととした。ゆくゆくは、UR

グループの一員として、これまで住宅関連データを多く扱ってきた豊富な経験を活かしていきたい。

近藤先生) これはどこの自治体でも課題なので、ぜひ横展開していただけるとよい。また例えば先ほどの3D都市モデルに情報を入れ込むこともありうると思う。今後の展開に期待している。

<ウエザーニューズ×浪江町>

小山先生) リスクロは防災用のシステムだと思うが、極端気候に活用できないか。農林水産業では極端気候への適応に苦慮している。リスクロを利用すれば集落や地域単位で全部のデータを蓄積できる仕組みだと感じた。今後の活用可能性について伺いたい。そこで問題になるのが精度。例えば霜情報は行政から出されるが、被害がない場合が多いため地域の農家は対策しなくなる。ところが、20回に1回ぐらい大きな被害が出ることもある。そのため、極端気候に適用できれば、地域にとってありがたいと思うが、可能性はあるか。

ウエザーニューズ) これまでは防災に限っていたが、「平時」という部分に仕組みの範囲を広げようとしている。自治体において、従来は防災部門担当者だけが気象に留意する必要があったが、昨今はゲリラ豪雨や熱中症等が発生することもあり、防災以外の部門でも配慮する必要が出てきた。極端気候やそれによる被害については、これまでデータがないことも多いが、データの蓄積さえできれば、事象を予測することが可能になる。ファクトデータの積み上げが重要であり、情報収集のツールとして、当社の災害用システムが一つの方法として成長できるのではないかと考えている。

小山先生) とても重要な取組だと思う。これまでは、一つ一つデータを入れて時間をかけて収集していたが、それが効率化され、データの精度も上がると思う。範囲拡大に期待している。

<DeNA×いわき市、富岡町>

小山先生) 津波の高さが8mと言っても小学生にはピンとこないと思うため、防災教育にとって良い取組だと思った。これを先端教育に活用できないか。中学生の数学で空間把握、2Dの平面データを頭の中で3Dの立体データに変換したり、図面を組み合わせたところでひっかかることが多い。教える方も子供たちが理解できているか、頭の中で図形を把握できているかを確認することが難しいと思う。高さを平面にしたり、体積や重さを入れたり今回のシステムは教育にいろいろ使えるのではないと思う。また防災については、いわきでは河川から津波が来たが、等高線から高さを示して災害時にどこに逃げればいいのかを示せば災害時の生存率にもつながると思う。実際の教育につながる可能性あるのではないと思うが、

いかがか。

DeNA) 平面で携帯をかざせば花火があがるような技術^(※)もあるので、それを応用して防災の教育等に活かせることも考えられる。今後検討したい。

※「紙面で楽しむ花火大会」などの AR 活用事例のように、平面では伝わりにくい情報を AR などで補完することが可能な技術。

紙面で楽しむ花火大会 <https://ar-go.jp/media/news/shinmai-ar-hanabi>

いわき市) 災害から避難するためには、地域内でどこが高台なのか、水の流れはどうかといった地勢を知ることは重要である。

このため、中学生向けの防災教育では、国土地理院の3D地図を活用し、地域の地勢の確認、また、実際にまち歩きする等により、地域を立体的に捉える力を養う防災教育に取り組んでいる。

<ゼンリン×大熊町、双葉町、浪江町>

近藤先生) ヨーロッパのリビングラボ活動に近いと思った。まだ始まったばかりだが、より成長するのではないかと期待している。今回は公用車に搭載したドラレコデータとのことだが、よりリビングラボらしい取組にするために、一般市民からの提供データに拡げるにはどうしたらいいかを、ゼンリンと自治体に伺いたい。

ゼンリン) 弊社と提携しているタクシーのドラレコ動画を使うことも可能だが、この地区では網羅率が低いため、自社の車で走ってデータを取得した。ご指摘の点は我々も課題として捉えている。我々はカーナビの地図を提供しているのでそこで何かできないかと考えている。また、今回事業に参加させていただいて他の事業者と話をすると、ドラレコ画像を持っているというお話もあるため、連携の術があるのではないかと考えている。

大熊町) 大熊町でも町車のドラレコ画像提供を検討したが、巡回ルートが不定であるため、動画と撮影地点の紐づけが困難であり断念した。一方、本事業に参加することで、町が現在道路保守にかけている人的コストが外の目で明らかになるなど、メリットもあった。道路点検の記録は紙ベースで行っているため、ただちに実証事業の100%が実装されなくとも、記録を動画でとれるだけでも町の事務コスト低減につながるのではと期待している。こうしたメリットがあれば、他の自治体でも検討可能であり、広がり期待できるのではないかと感じた。

浪江町) 一般の方から画像データをどのように提供していただくかについては、いろいろ課題があると思うが、ゼンリンと検討し、幅広くなるよう模索していきたい。

近藤先生) いろいろな立場の人がフラットな関係で議論して、失敗を恐れず試すというのがリビングラボの強みなので、今までのアプローチと全く異なるものと理解していただきたい。今は困難に見えていることもあまり恐れずにチャレンジしてもらおうとよりよい成果になると思う。

<フジタ×南相馬市、飯館村>

小山先生)こんなに短期間でこのレベルで測定できるのはとても素晴らしい。これをどう活用するか。例えば猿がどういうところに集まりやすいかなど、いろいろ使えそうだと思ったが、他のデータとの組み合わせ等は考えられないか。データ所有の問題はあるかもしれないが。また、農地や里山、元農地で山林になっているところなど、拡張の可能性や具体的な使い方について考えられていることを伺いたい。

フジタ)もともと建設にかかわる生態系の評価にデータを活用することを考えていたところ、今回飯館村と南相馬市から山林の話があった。三次元で管理することで見える化し、地域の情報を重ねることで今までわからなかったことが繋がって、課題が把握でき対策を練ることができる。このデータを南相馬市と飯館村と相談しながら実務にどのようにフィッティングできるか考えていきたい。

また、データの活用からは少し話がそれるが、地元の建設会社がこういう手法を利用できるようにすることで、災害が起きた時の利用や、地元企業がドローンを使って何かやりたいといったような、地元企業の多角経営に繋がっていけばいいと考えている。

南相馬市)昨今の話題の一つに、スギ花粉飛散防止策として、花粉が少ない苗木への植え替えがある。本来60年程度で伐採するが、採算が合わないということで70年経っても切っていない木が増えており、それが花粉を飛ばしている。山林は個人が所有していることが多いため、伐採にいくらかかるか、いくらで売れるかを今回の技術でいくらの価値ある、ということをお示しすることで、スギ伐採が進めば有益な技術になると思う。この技術によって南相馬市だけでなく、全国的に横展開してスギの植え替え等、林業振興が進めばいいと考えている。

<復興庁：全体の所感>

石垣参事官)当初12提案のうち、マッチングでき実証に進められたのは6提案だった。

今回の取組では自治体と企業が主役であり、復興庁は見守り役であるが、見守っている中で順調に進むケースと進まないケースのパターンが見えてきた。今後の参考のため、発表資料の通りまとめた。例えば、課題が明確、具体的であるケースや、官民双方の担当者が自分事として積極的に関わっているような場合はうまく進むが、そうでないとなかなかうまくいかないようだ。

近藤先生)横浜市リビングラボについて調査研究を行っているが、リビングラボに関わっているメンバーが複数のプロジェクトに関わるとうまく進むことがわかってきている。広域で展開できることは非常に重要だと思った。民間企業間、行政間など様々なステークホルダー間で連携まで行かなくても対話の促進があると良いだろう。住民からの具体的な地域課題の吸い上げに課題があるということだが、

自治体の職員も住民だろうから、その立場で何か対話ができる場を積極的に作ると良いのではないだろうか。

小山先生) 一緒にできそうなプロジェクトが沢山あると感じた。今までの国の予算だと使途や KPI が限定され、動きにくかった。今回その制限がなかったお蔭で非常に短期間に効率的に進めることが出来たのではないかと感じた。また、自分たちで積極的に課題に取り組んでいる点も非常に良いと感じた。大規模な予算がついた事業で、ただただ疲弊してきたのが、過去 10 年間の反省点でもある。今回、提案型、ボトムアップなどの形であることで、改善されたのではないかと感じた。ただ、これを続けて欲しい。進捗管理だけされるような事業ではなく、みんなが生き生きと参加できる継続できる事業として欲しい。

以 上